

特 248

834

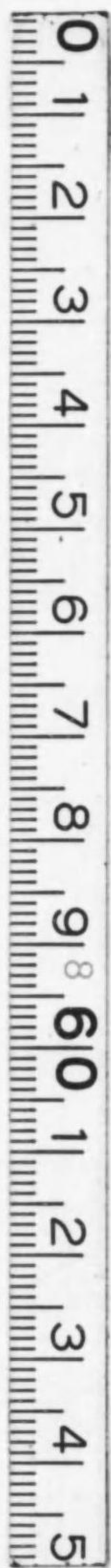
寄贈

年頭苦言

液體燃料問題の解決は
國民總がかりて之を斷行せよ

長谷川 尙一

(昭和十二年元旦
石油國策論集第二附錄)



始



特248
834

著者寄贈本

年頭苦言

液體燃料問題の解決は
國民總が、りて之を斷行せよ

長谷川 尙一

近時對露對支外交の行詰りについて、當局の無策無能に對する、非難攻撃の聲が高
い。余の見る所では、此等の非難攻撃は何れも見當違ひである。蓋充實せる軍備の
後補のない外交は、畢竟辭令の交換に過ぎず、イザと言ふ場合には、如何に巧妙な辭
令を用いても、口先ばかりで強がつて見ても、最後の解決はつかぬと言ふ。好備の實
物教訓である。即ち當局の無策無能を責める前に、先づ其原因を究める必要があると
思ふ。

日本が如何に嚴重警告を連發して見ても、結局手出しは出來ぬと、見縊つて居るか
ら、露國も支那も横を向いて舌を出して居る。のみならず、露國は幾度か不法行爲を

繰返し、コレでもかと言はんばかりの挑戰的態度を示しても、口先の抗議警告以上の手段に、出ることは出来ないのである。實力の後楯がなくては、誰にやらせた所で同じことで、言分の通る筈はないのだから、先以て實力のある後楯（充實せる軍備）をつけてやらせて見るが良い、其準備もせずに無責任な非難攻撃をするのは、國民の方が無理である。

滿洲事變以來の日支關係は、殆んど交戰狀態を續けて來た、幸に昭和八年末、北支停戰協約が成立して、平和狀態に復したが、若し此協約が成立せず、我軍隊が長驅して、萬里の長城を越えて進んだとしたら、英米露は最早事態を成行のまゝ、靜視しなかつたであらふ、もし向ふからやつて來られ、ば、イヤでも相手になつて、追拂ふより外なかつた、思へば誠に危機一發であつた。此時余が第一に憂へたのは、イヤといふ場合に、我海陸軍隊の原動力たる液體燃料を、如何にして供給するかの問題であつた。當時我國平時の石油需要量約貳千萬石に對し、その供給量は、國內及樺太滿洲を併せて約三百萬石に過ぎず、差引千七百餘萬石を、外國の供給に仰いて居たのである。此狀

態では戰爭をしやうにも、軍艦も飛行機も自動車も、原動力がないから丸で動かさず、陸軍も海軍も全く活動することが出来ないであつた。

即ち余は昭和八年五月來、再三朝野に訴へて、燃料問題解決の急を高唱し、（拙著石油國策論集目次九、十、十一参照）其實行案として、政府をして三年間に五億圓の燃料費を支出せしめんとした。其内譯は

金三億貳千萬圓 石炭低溫乾溜及石炭液化工業助成金

金壹億五千萬圓 國內及北樺太油田試掘並に採掘助成金、滿洲頁岩乾溜工業助

成金

金參千萬圓 燃料の節約、酒精其他混合代用燃料工業助成金

合計 金五億圓

而して當局に於ても、稍余の提案に似たる非常時燃料豫算が、作成せられたるやに仄聞したが、北支停戰協定の成立と共に、列國の動靜一轉し、米國は我石井經濟使節を歓迎せる爲め、我朝野は忽ち昨日までの日米開戰の惡夢を忘れて、日米親善を謳歌

し、甚しきは我國の重大危機は、既に解消せり等と説く近視眼者流さへあつた。斯くて切角解決の機運に向はんとした燃料問題も、又々閉却せられて終つた。聊も我國の海外に支拂ふた石油代金は、昭和八年度に一億餘圓であつたのが、十年度には一億六千餘萬圓となり、十一年度には約貳億圓に上つて居る。即ち僅か四年間に二倍に増加して居る、然るに昭和七年以來、國內及北樺太油田試掘並に採掘助成、石炭低溫乾溜並に液化工業助成等に、年々僅に貳百萬圓たらずの支出のあつた外は、燃料問題解決に關する何等施設の行はるゝを見ずして今日に及んだ。斯くの如きは獨り政府當局の責任たるのみならず、國民も亦その責任を分たなければならぬ。

最近東亞の形勢は著しく變化して來た。露國は第二回産業軍備五ヶ年計畫を三年間に完了し、外蒙を赤化して手中に收め、滿洲國及我國との國境線には、完全に攻防の設備を整へて、有力なる軍隊を配置し、優秀なる飛行機七千臺を用意する等、我國と戦端を開いても、勝算の自信が出來たと思ひ、幾度か越境其他の不逞行動を反復して挑戰的態度を示し、日露の關係は一觸即發の危險に迫つて居るのであるが、我國の隱

忍自重によりて、僅かに事なきを得て居るのである。

更に支那は二十年來の抗日教育が漸く結實し、蔣介石の中央集權は益々具體化して來た。二百萬の軍隊は歐米式に武裝訓練せられ、三年計畫の一千臺飛行機も既に完成せる等、最早昔日の支那式軍隊ではない。左らぬだに日本が支那に手を出せば、露國は勿論英米佛が、忽ち支那を援けて、日本を袋だゝきにせんとすることを知つて、如何に我國が十八番の嚴重警告を連發しても、嚇して見ても、結局手出しはせぬと甘く見て居るから、支那は横を向いて舌を出して居る。拳固は振り上げたものゝ、結局は手を組んで行かなければならぬ兄弟分の間柄と思へば、無下に殴り附けて終もふ譯にも行かず、振り上げた拳固のやり場に困つた日本は、立往生をして喰つて居る外ない現状にある。斯くして事態は對露對支共に極度に行詰つて終つた。會々不測事變が支那に突發して、行詰の状態にあつた我國はホット一息の有様であつたが、此一息は眞に一瞬間の小康に過ぎなかつた。支那は今回の事變によりて、統一的國家の資格試験に見事に合格して、完全な獨立國家の資格免狀を取つて終つた。即ち事變

の爲めに蒋介石を失つて、群雄の政權爭奪の舊態に逆轉するのではないかといふ懸念を一掃して、支那の中央政權は更に動搖の状なく、國民も亦平靜を失はず、支那の中央集權、國民統一は、最早蒋介石を失つても、ピクともせぬ堅實性を持つて來たことを、如實に世界列國に證明して見せた。蒋介石が返り咲くにしても、又何人が代つて支那の主裁者になるにしても、抗日失地奪還を旗印として、國民を統一する政略は依然變化なきのみならず、今後の抗日運動は益々國民的になるに相違ないから、將來の對支關係は一層困難である。

日獨協定や日伊親善で、我國が孤立無援の窮地を脱したと悦ぶのは、甚しき早計且謬見である。英米露佛は何れも猜疑嫉妬の眼で、日獨日伊の和親關係を見て居る。殊に從來無言裡に對立状態にあつた日露關係が、今回の日獨協定によりて、表面的に公言された。支那は自國の赤化されるのも知らずに、此所ぞとばかりに露國に接近し、益々國民の抗日氣勢を煽り、露國と提携して即時日本と開戦すべしと揚言して居る。斯くして我國の對露關係の將來も亦愈々困難になつて來た。東亞の形勢は如何に急轉

するか計り知るを得ず、國民の一大試練を受くべき日が、やがて到來すべきことを覺悟せねばならぬ。

今日の世界情勢に於て、一朝亞細亞の平和が破れ、ば、世界列國は忽ち動亂の渦中に陥り、第二の世界戦争の幕が開かれる。而して亞細亞の平和を維持し世界大戦を未前に防ぐのは實に我國の使命である。我國が此大使命を全ふするの途一に軍備を充實し、歐米野心國に乗ずる隙を與へぬ用意をするより外ないのである。即ち國力軍備を充實する爲めには、何ものを犠牲にしても國家生命の源泉たる、液體燃料の自給自足に驀進する外手段はないのである。

近時石炭液化事業は急速の進歩を示し、獨逸の如きは此方法によりて、同國の主要燃料たる揮發油需要の八十パーセントを充し、來年度に至れば優に自給自足出来る見込なりと聞く。

我國に於ても液體燃料問題解決の一手段として、資金七億圓七ヶ年繼續の豫算を以て、官民合同事業として、石炭液化工業に着手する由である。勿論それも一案として

大に賛成はするが、國內に全く石油を産出しない獨逸と、無慮五十億坪の石油地帯に恵まれて居る我國とは、當然事情を異にするから、若し石炭液化一本槍で、液體燃料問題を解決せんとし、石油事業を忽にするが如きことでは、その本を忘れて末に走るのであるから到底同意することは出来ぬ。仄聞する所によれば、此計畫は昭和十二年より事業に着手し、十四年度より年々生産量を増加し、十八年度には一ケ年貳百萬噸の揮發油及重油を生産する見込なる由。然るに我國液體燃料需要の増加率を見るに、現在は一ケ年三十五萬噸である。故に假りに現在の増加率に變化なきものと見ても、今後七ケ年間の需要増加量約二百五十萬噸に上り、七ケ年末には結局五十萬噸の不足となる。況んや我國勢の進展日進月歩の今日、七ケ年後には需要の増加率、恐らくは現在に二三倍するものと見なければならぬ。故に斯くの如き估息案は五十歩百歩にして、從來と相去ること遠からず、依然需要が供給の後を追かけ、然かも其の距離は年々大きくなつて行くのであるから、何時までたつても國家當面の危急を濟ふこと不可能である。

前に述べた通り、獨逸は國內に石油を産出せぬ爲め、絶對の必要に應ずる方策として石炭液化の方法を取つたのであるが、元來人造石油は、品質から見ても生産費の嵩む點から見ても、到底天然石油の比でないのである。然るに我國は領土内に廣大なる油田を有し、其大部分が未開發のまま、放擲されて居るのである。而して從來悲觀されて居た秋田平原、越後平原の油田が、昨年來劃期的盛況を呈し、平原大油田出現の機運將に到來して居るのである。更に又北樺太の油田の試掘も例外なしに成功出油して、その埋藏量の豊富なることを如實に物語つて居るのである。即ち我國の燃料國策としては、石炭液化事業に偏依することを避け、豊富なる油田の開發を怠つてはならぬ。而して國家危急の現狀に處するには、生産費の多少、品質の優劣等を、顧慮して居られる場合でない。即ち我國の液體燃料問題の解決は、石炭液化にせよ、油田開發にせよ、其他苟くも液體燃料の得らるゝ方法なれば、費用を惜まず、即時斷行する決心でなければ、燃料問題の解決は到底不可能であることを斷言する。

故に余は昭和十二年度より十八年度迄七ケ年繼續事業費とし此際非常時液體燃料公

債貳拾億圓を發行し、國內油田試掘開發の強行と共に、石炭液化事業を敢行して、一舉に液體燃料の自給自足に驀進し、以て此重大時局に善處せんことを提案する。

非常時液體燃料公債案

一金貳拾億圓

非常時液體燃料公債

内 譯

一金拾四億圓

石炭液化事業資金(現在案の倍額)

一金六億圓

國內及北樺太油田試掘費其他

元來燃料公債は、その生産的な點に於て、他の公債と趣を異にする、即ち此公債によりて生産される液體燃料は、油代金として直ちに海外に支拂はるゝ金貨に充當されるのである。今非常時液體燃料公債貳拾億圓を、四分利で發行するとせば、此利子一ヶ年八千萬圓は海外へ流失することなく、其まゝ國民の收得となるのである。十一年度に油代金として外國に支拂はれる金額約二億圓、而して此金額は急激なる需要の増加と共に、年々増大するのであるが、假りに需要の増加を見越さず、現在の儘の計算

によるも、公債の利子八千萬圓を差引き、年々壹億二千萬圓の公債元金を償却することが出来るのである。斯くの如く今日貳拾億圓を以て、直ちに石炭液化事業と石油試掘の強行に着手すれば、産油量の増加と共に、油代金として直ちに支拂ふ金貨の海外流出を遞減することが出来るのである。此見易き算盤勘定を解せずして、何時までも一文勘定の當座估息の手段を繰返して居たのでは、到底眼前に迫つて居る國家の危急の間に合はぬのは勿論、何年経つても液體燃料饑饉から免れることは不可能である。

由來忽ち熱し忽ち冷るのは我國民性の短所である。昭和八年我國は危急存亡の重大時局に直面せるに當り、當局は周章狼狽泥繩式に、非常時燃料案を計畫したのであつたが、北支停戰協定で、我國に對する列國の強硬態度が緩和されると、忽ち咽元過ぎれば熱さを忘るゝが如く、切角思ひ立つた液體燃料問題の解決も、何時か忘れて終つて平氣で居る。對支關係が瞬間的にもせよ小康の状態にあるとか、日獨協定や日伊親善が成立したと言つて、忽ち樂觀油斷して、北支停戰協約成立當時の轍を踏み、又々燃料問題の解決を怠るやうなことがあつては、天譴忽ち降つて、愈々國家危急の土壇

場に陥り、泣いても騒いでも及ばないことになつて終ふ。支那の事變に僥倖されたと思つた瞬間的の小康は忽ち消へ去つた、支那は統一國家として我國と提携どころか改めて我國に向つて來やうとして居る。其後方には露國が手具脛ひいて控へて居る。官民共に餘程禪を緊めてかゝらないと、到底一等國面しては居られないのである。

今日の國際關係は所謂喰ふか喰はれるかの時代である。列國の軍備充實競争は、世界大戰の終熄と同時に猛烈に開始された。互に他に喰はれぬ用意をすると共に、アハよくば他を喰はふとして、爪牙を磨いて居るのである。而して本年を以て愈々軍備制限無條約第一年を迎へた。英米は争つて大艦建造に老大な計畫を立て、霸を太平洋に唱へんとして居る。彼等の軍備は侵略主義である、東洋に事があれば、機を逸せず割込んで侵略の手を伸べんとし、虎視眈々たる情勢にある。我國の軍備は反之絶対に防禦主義である。野心國の重壓を排して、東洋の平和を維持し、彼等の侮蔑を許さざるを以て目標とするものである。英米が霸を太平洋に争はんとして製艦競争をするなら、勝手にやらせて置くが良い。我國は彼等が東洋にノサバリ出して來ても、勝手な

眞似をさせぬ丈けの用意をして居れば良いのである。斯く言へば甚だ簡單であるが、東洋の利權を目ざして、大艦隊の建造、日進月歩の新軍機發明改良に汲々たる彼等の入來を迎へて、東洋の平和、延いて世界の平和を維持して行く爲めには、飽くまで軍備を充實する外ないのである。況んや防衛を本義とする我國の軍備に於て、最も緊急充實の必要のあるのは飛行機である、昭和九年一月余が飛行機五千臺國防主義を唱へた當時、露國の飛行機は二千五百臺であつたが、昭和十一年末には七千臺に増加し、然も其の優秀に於て世界第一を誇つてゐる。顧みて我國飛行機の現勢を思ふと、冷汗滿背イザといふ場合にドウなるかと思ふ。(拙著石油國策論集目次一二參照)而して如何に軍備を充實しても、其活動力たる液體燃料がなければ、忠勇無比の將卒を有する我海陸軍も、其實力を發揮することが出来ないのである。

即ち余は國民に年頭の苦言を呈し、速かに屠蘇の醉から醒めて、緊張一番せんことを熱望して止まないものである。蓋國家の生存は結局國民の生存であるから、國民は政府當局の施設にのみ依頼することなく、國民共同の力を以て、國家生存の源泉たる液

體燃料問題の解決を敢行せねばならぬのである。而して斯くするこそ、宇内無比の日本に生を享けた同胞の當然盡すべき責務である。

世界の平和を維持し、國威を中外に宣揚する途、一に軍備の充實あるのみ、而して軍備の充實は一に液體燃料の自給自足あるのみである。

昭和十二年元旦

昭和十二年一月十一日 印刷
昭和十二年一月十五日 發行

(石油國策論集第二附録)

非賣品

著者 長谷川 尚一

發行者 中西 貞一
東京市麹町區内幸町一ノ五

印刷者 福神 和三
東京市京橋區銀座西一ノ七

27

終

